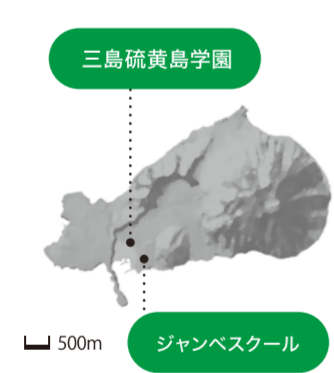


# 三島村・鬼界カルデラジオパーク 2022 鹿児島県 三島村 カレンダー



三島村の教育と学校の歴史には、困難な時代に生きた親たちの軌跡があり、私たちに今を生きる勇気を与えてくれる。

現在、遺されたアルバムから昔の学校の様子がわかる。アルバムには学校が始まった一九三〇年以降の木造校舎(A)と一九五五(昭和三〇)年に地区住民と建てた旧鉄筋校舎(B)(C)(D)前・南東硫黄株式会社事務所、現「ジャンベスクール」の写真がある。

そして、世界恐慌から一年後の一九三〇(昭和五年)年中之島で小学校令実施について議案が開かれた(※当時三島村は十島村の一部だった)議案ではじめ、財政的に一律の施行は難しいので、学校設置は中之島一校のみと決議したが、悪天候で議案に遅れた三島村の議員達がこれに反対。島の将来について強く説き、決議を覆して各島一律に学校を設置させた。

三島村の教育と学校の歴史  
日本初の近代的学校教育制度は一八七三(明治六)年に発布された。三島村は一九三〇(昭和五年)にこの制度を執行し、五〇年遅れて本土並みの教育が始まった。

## 硫黄島

## 出典

表紙『三島村の教育と学校の歴史』  
【写真提供】三島村  
【参考文献】三島村誌編纂委員会(編)(1990)『三島村誌』

1月『熊野神社と日本史』  
【取材協力】安永暉  
【写真提供】三島村  
【参考文献】三島村誌編纂委員会(編)(1990)『三島村誌』

2月『石器とカルデラ噴火』  
【取材協力】鹿児島国際大学考古学研究室(中国聡研究室)・鹿児島大学小林哲夫・日高武二・日高重行  
【写真提供】鹿児島国際大学考古学研究室(中国聡研究室)  
【写真撮影】友枝望  
【参考文献】中国聡(2010)『大里小・中学校保管の考古学資料について-土器を中心として-』鹿児島国際大学文化学部中国聡/三島村教育委員会(編)(2015)『黒島平家城遺跡;大里遺跡ほか:村内遺跡発掘調査等事業報告書』『三島村埋蔵文化財調査報告書,第1集』/小林哲夫(2021)『鬼界カルデラの研究史にもとづくカルデラ噴火の全体像:カルデラ噴火の長期的予知・予測への将来展望』/三島村誌編纂委員会(編)(1990)『三島村誌』

3月『台湾ホウキガニ』  
【取材協力】鹿児島大学名誉教授 鈴木廣志  
【写真提供】鹿児島大学名誉教授 鈴木廣志  
【参考文献】山田守彦(2016)『火山地帯に生きる不思議なカニ台湾ホウキガニ』さくらじまの海75,2-3.

4月『オンボ崎と遣唐使漂着伝説』  
【取材協力】三島島学園講師 白石隆樹・山崎晋作・山口清佳  
【写真提供】山崎晋作・三島村  
【参考文献】原田信之(2009)『鹿児島県硫黄島の遣唐使漂着伝説と灯台鬼説話』新見公立短期大学紀要30,181-195. / 白石隆樹(2020)『竹島の歴史を継承していくために』/三島村誌編纂委員会(編)(1990)『三島村誌』

5月『タケシマツシロラン』  
【取材協力】神戸大学末次健司・山崎晋作  
【写真提供】神戸大学末次健司  
【参考文献】末次健司・末次博士の新種発見記第1回光合成も開花もやめた不思議な植物「タケシマツシロラン」,日本の生き物を調べる・わかる図鑑.jp.2017-09-12. https://i-zukan.jp/columns/6.(参照2021-10-08)

6月『空御前と炭焼き窯跡』  
【取材協力】日高寛・荒木真歩  
【写真提供】三島村  
【写真撮影】友枝望  
【参考文献】三島村誌編纂委員会(編)(1990)『三島村誌』/喜多路(1985)『「うづぼ舟漂着伝承」を構成する諸信仰・文化について』九州人類学会報13,27-33.

7月『大里の盆・弓矢踊り』  
【取材協力】大里地区・上村委成・日高政行・日高寛・日高義昭・平良一幸  
【写真提供】三島村  
【参考文献】三島村誌編纂委員会(編)(1990)『三島村誌』

8月『片泊の盆踊り』  
【取材協力】片泊地区・川野静・山口正人  
【写真提供】三島村  
【参考文献】三島村誌編纂委員会(編)(1990)『三島村誌』

9月『十五夜』  
【取材協力】吉川伸一・日高喜世子  
【写真提供】山崎晋作・三島村  
【参考文献】三島村誌編纂委員会(編)(1990)『三島村誌』

10月『あくち鉄砲』  
【取材協力】三島村片泊学園・山口正人  
【写真提供】三島村片泊学園  
【写真撮影】友枝望  
【参考文献】山と溪谷社。「樹に咲く花 合弁花・単子葉・裸子植物」.日本の生き物を調べる・わかる図鑑.jp.更新日付不明. https://i-zukan.jp/contents/12/viewer?genre=3&page=179&word=モククダバナ,(参照2021-10-08)

11月『平家城・初期畜産の遺構』  
【取材協力】鹿児島国際大学考古学研究室(中国聡研究室)  
【写真提供】鹿児島国際大学考古学研究室(中国聡研究室)・三島村  
【参考文献】三島村教育委員会(編)(2015)『黒島平家城遺跡;大里遺跡ほか:村内遺跡発掘調査等事業報告書』『三島村埋蔵文化財調査報告書,第1集』/三島村誌編纂委員会(編)(1990)『三島村誌』

12月『硫黄島の霜月祭』  
【取材協力】九州大学大学院理学研究院 清川昌一・盛田義春  
【写真提供】九州大学大学院理学研究院 清川昌一・三島村  
【参考文献】九州大学。「薩摩硫黄島における鉄チムニーマウンドを発見〜初期地球海底のモダンアナロジー〜」.九州大学.2021-01-12. https://www.kyushu-u.ac.jp/ja/researches/view/550,(参照2021-10-07)





硫黄島

熊野神社と日本史

熊野神社は、和歌山にある熊野三山の祭神を祀った神社。硫黄大権現宮とも呼ばれ、八潮太鼓踊り<sup>A</sup>や九月踊り<sup>B</sup>など硫黄島の祭祀に深く関わる。建立約千年の熊野神社は日本史にたびたび登場し、島の営みを世に残してきた。

建立は平安時代の二七七年。俊寛とともに硫黄島に流刑となつた平康頼と藤原成経が、帰京を願ひ、熊野の神々を分霊してこの地に祭つた。翌七八年に赦免船が来て成経と康頼は京へ戻る。翌七九年、残された俊寛は絶食して自害した。

硫黄島の伝承では、俊寛の死から六年後の二八五年、源氏から逃れた八歳の安徳帝が硫黄島に来島する。二〇二二年に二十五歳になつた安徳帝は、熊野神社の境内に大宮を造営して、黒木御所から移り住む。大宮の奥には三種の神器<sup>C</sup>が祭られた。また、大宮が後世に残るようにと翌三年には石の鳥居が設けられた。家来が石探しに出かけ、大分で偶然出会うた平有盛と平行盛<sup>D</sup>（※平家物語では二人は既に亡くなつてい）の寄進で加工した石が島に運ばれたという。

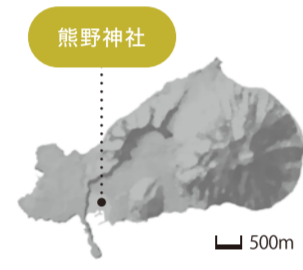
次に熊野神社が歴史に登場するのは室町時代で、僧桂庵玄樹は、一四九九年に島津忠昌が社殿を修復したと記している。また二五九八年朝鮮の役で安徳帝の末裔、長濱権之丞吉延が島津義弘を救つた際には、多くの奉納品が贈られた。社殿の修理費も一八三九年まで計五回分が島津家より出された。

社殿は老朽化で二九八七年に改築され<sup>E</sup>、長い歴史の痕は石の鳥居や灯籠に残る。

思い出話

「古い社殿の左手奥の広場は、八潮踊りの踊り手が中休みのときに水浴びする場所でした。あと、社殿に古い刀が納めてあつて、裏手から内緒で持ち出してチャンバラしてました。」

硫黄島地区七〇代男性



1

日	月	火	水	木	金	土
26	27	28	29	30	31	1 元日 旧 11/29
2 旧 11/30	3 旧 12/1 ● 新月	4 旧 12/2	5 旧 12/3	6 旧 12/4	7 旧 12/5	8 旧 12/6
9 旧 12/7	10 旧 12/8 ● 上弦 成人の日	11 旧 12/9	12 旧 12/10	13 旧 12/11	14 旧 12/12	15 旧 12/13
16 旧 12/14	17 旧 12/15	18 旧 12/16 ○ 満月	19 旧 12/17	20 旧 12/18	21 旧 12/19	22 旧 12/20
23 旧 12/21	24 旧 12/22	25 旧 12/23 ● 下弦	26 旧 12/24	27 旧 12/25	28 旧 12/26	29 旧 12/27
30 旧 12/28	31 旧 12/29					





大里

石器とカルデラ噴火

黒島では珍しい石器の発見がある。一つは縄文時代後期(約四千年前)の石鉞(いしもり、左写真)、赤鼻(アカバナ)牧場(右写真)で発見された。魚を獲る石鉞としては、日本最南端の発見となる。なお、朝鮮半島、佐賀、長崎などの沿岸部でも、同様の鉞が出土している。

もう一つは丸ノミ形石斧(せきぶ)で、赤生木(アコギ)で採取された縄文時代草創期(約一万三千年前)のもの。三島村最古の人工物であることに加えて、国内でも非常に珍しい種類の石斧で、丸木舟を作る道具という学説がある。

また近年は、石器を発見した箇所の地質から、期せずして七千三百年前に鬼界カルデラで発生した大規模噴火(通称はアカホヤ噴火)後の様子がわかってきた。黒島には標高七〇〇〜八〇〇mより低い地域では、アカホヤ噴火の堆積物が見られない。これは噴火後にその高さの津波が黒島を襲い、噴火堆積物が流出した可能性を示す。

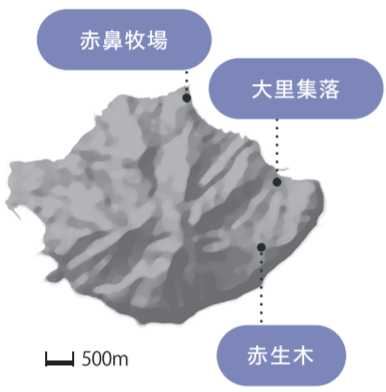
たとえば高地にある赤生木(標高三〇〇m)では、アカホヤ噴火より古い年代の石斧が出土した。一方、赤生木より低い位置の赤鼻牧場(標高約七〇〇m)では、表層の黒色土からアカホヤ噴火以降の年代を示す石鉞が出土した。本来ならその直下にあるはずのアカホヤ噴火噴出物の痕跡はまったくない。

さらに低い大里集落(標高四〇〇〜五〇〇m付近)でも、遺物の年代はすべてアカホヤ噴火後であった。こうした分布の状態から、標高の低い地域の古い遺物は、噴火後に発生した大津波で流出した可能性が高いことを示唆している。

思い出話

「石斧は、赤生木の牧場整備中に拾いました。全くの偶然でした。」

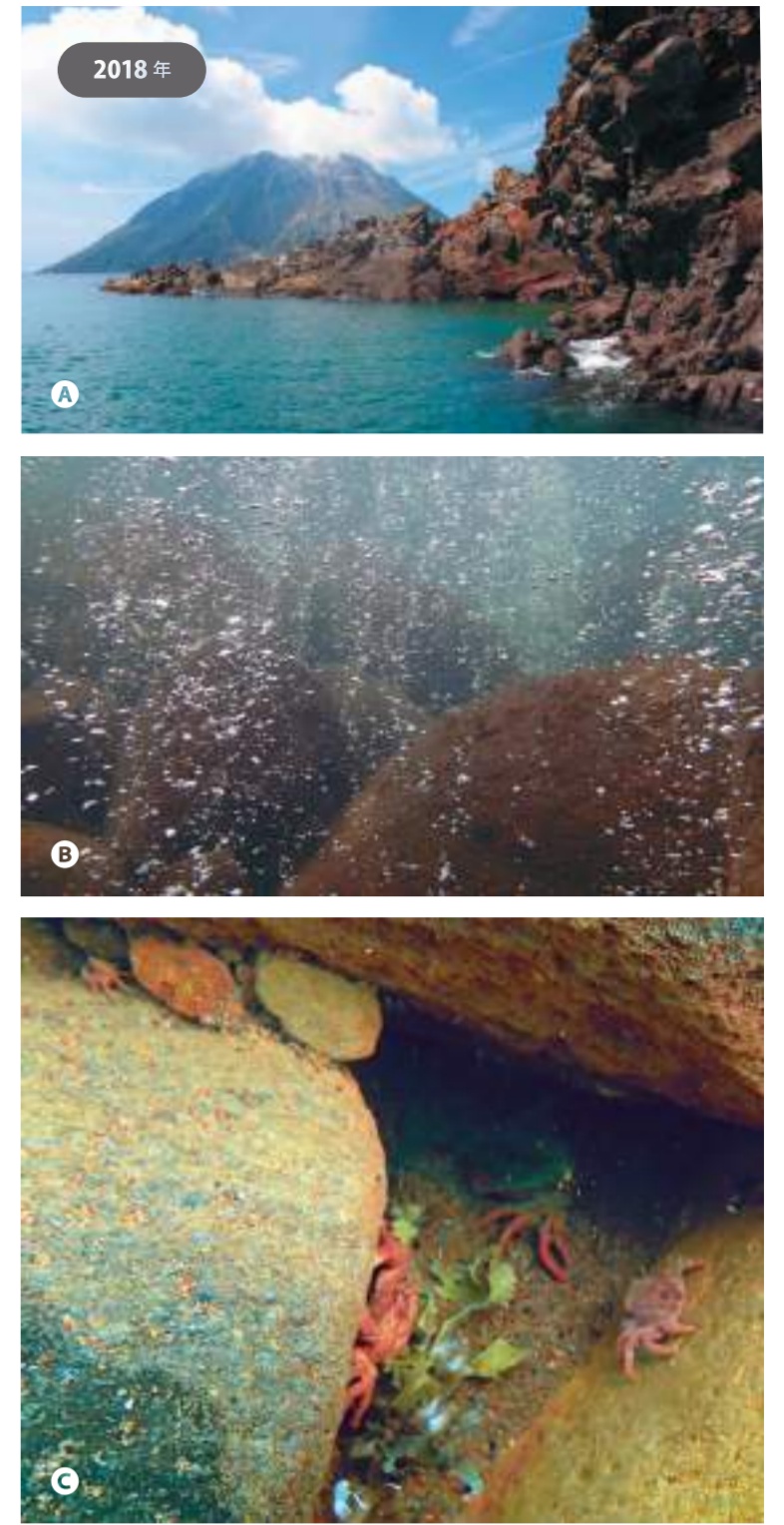
大里地区 六〇代 男性



2

日	月	火	水	木	金	土
30	31	1 ● 新月 旧 1/1	2 ● 旧 1/2	3 ● 旧 1/3	4 ● 旧 1/4	5 ● 旧 1/5
6 ● 旧 1/6	7 ● 旧 1/7	8 ● 上弦 旧 1/8	9 ● 旧 1/9	10 ● 旧 1/10	11 ● 建国記念の日 旧 1/11	12 ● 旧 1/12
13 ○ 旧 1/13	14 ○ 旧 1/14	15 ○ 旧 1/15	16 ○ 旧 1/16	17 ○ 満月 旧 1/17	18 ○ 旧 1/18	19 ○ 旧 1/19
20 ○ 旧 1/20	21 ○ 旧 1/21	22 ○ 旧 1/22	23 ● 天皇誕生日 旧 1/23	24 ● 下弦 旧 1/24	25 ● 旧 1/25	26 ● 旧 1/26
27 ● 旧 1/27	28 ● 旧 1/28	1 ● 旧 1/29	2 ● 旧 1/30	3 ● 旧 1/31	4 ● 旧 2/1	5 ● 旧 2/2





硫黄島

タイワンホウキガニ  
昭和硫黄島A南側の海底には、火山性ガスが噴出し温水が湧く「海底温泉」と呼ぶ特殊な環境があるB。この場所で二〇一一年にタイワンホウキガニが発見された。二〇〇〇年に台湾北部の亀山島で発見された甲長二cmほどの赤い蟹で、ハサミの先のホウキ状の毛が名前の由来となる。なお白い体毛のようなものはバクテリアによるもの。

発見箇所は、台湾、昭和硫黄島、悪石島の海底温泉のみ。特殊な環境に住む理由を探るため二〇二二年から鹿児島大学水産学部の鈴木廣志教授(二〇一九年定年退職)の研究グループが調査を始め、二〇二五年からかごしま水族館が飼育実験などを行った。

二〇二五年には昭和硫黄島の水深約七mの海底で蟹の生態を観察した。海底温泉は魚をまれに見るが、生き物の気配はほぼない。しかし、タイワンホウキガニは岩や砂の上、温水が湧く穴などいたる所にいたC。

捕獲したところ錦江湾の海水で長期飼育ができた。餌は、オキアミ、魚肉など。特別な餌はいらない。火山ガスの成分で栄養を得るわけでもなく、熱源を避ける傾向から、他の生物との棲み分けで海底温泉にいる可能性がある。生息範囲を台湾から昭和硫黄島まで、どのように広げたかなど謎も多い。

思い出話

「タイワンホウキガニもそうですが、生き物はどんな場所でもケンカせず上手に棲み分けて共存します。生き物から共存の大切さを学びました。」

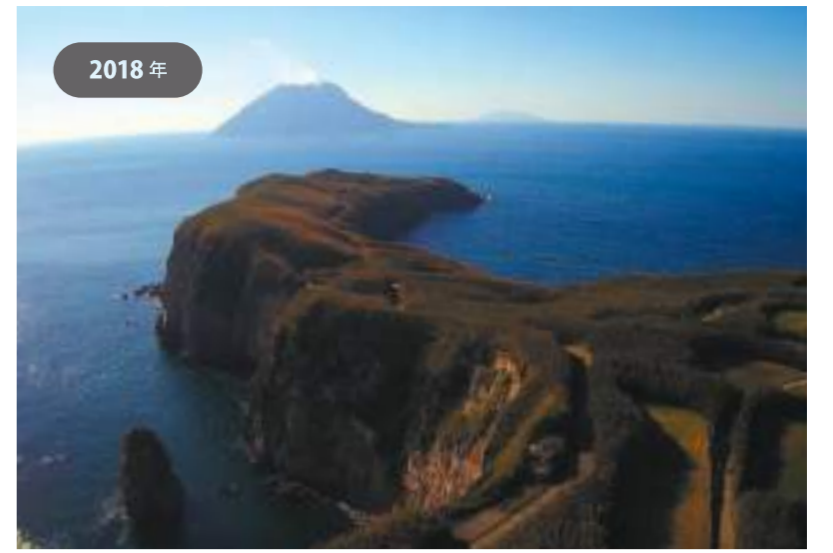
鹿児島市在住六〇代男性



3

日	月	火	水	木	金	土
27	28	1 ● 旧 1/29	2 ● 旧 1/30	3 ● 新月 旧 2/1	4 ● 旧 2/2	5 ● 旧 2/3
6 ● 旧 2/4	7 ● 旧 2/5	8 ● 旧 2/6	9 ● 旧 2/7	10 ● 上弦 旧 2/8	11 ● 旧 2/9	12 ● 旧 2/10
13 ○ 旧 2/11	14 ○ 旧 2/12	15 ○ 旧 2/13	16 ○ 旧 2/14	17 ○ 旧 2/15	18 ○ 満月 旧 2/16	19 ○ 旧 2/17
20 ○ 旧 2/18	21 ○ 春分の日 旧 2/19	22 ○ 旧 2/20	23 ○ 旧 2/21	24 ○ 旧 2/22	25 ○ 下弦 旧 2/23	26 ○ 旧 2/24
27 ○ 旧 2/25	28 ○ 旧 2/26	29 ○ 旧 2/27	30 ○ 旧 2/28	31 ○ 旧 2/29	1	2





竹島

オンボ崎と遣唐使漂着伝説  
 南西諸島北部は、遣唐使の航路上にあるためか、遣唐使漂着の伝承が複数ある。そのうち『日本書紀』にある第二回遣唐使の遭難(六五三年)が歴史上確かとされる。

この時に遭難したのは遣唐使船二隻のうち第二船で、大使の高田根麻呂(たかたのねまろ)ら百二十人のうち、五人だけ竹島に漂着して生き残ったという。竹島の伝承では、船の板につかまった五人は竹島の小アビ山に漂着、崖を登り竹やぶを抜け、血みどろで人里へ着く。島民の看護で一命をとりとめた。その後、五人は同僚の遺体を火葬して、竹の筏で都へ戻ったという。

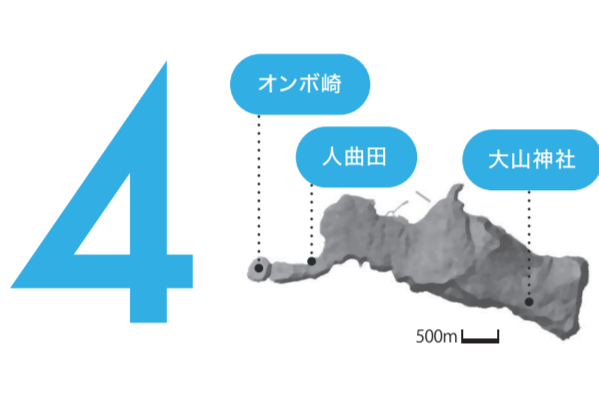
竹島にはこの遭難事故の痕跡が今も残る。遭難者はみな体を『くの字』にして亡くなったおり、遺体が多くあがった場所は『人曲田(ひとまげた)』と呼ばれる。そして小アビ山には亡くなった大使を祀る大山神社<sup>①</sup>がある。神社の名は、大使であった高田根麻呂の冠位『大山下(だいさんげ)』に由来する。

あがった遺体はオンボ岬で火葬したという。悲しい歴史のあるオンボ崎だが、いまは硫黄岳と鹿児島本土を展望できる<sup>②</sup>穏やかな場所でもある。

思い出話

「中学生の頃にオンボ崎にあったキャンプ場<sup>③</sup>に行きました。黒島にない見はらして、海や夕陽や、島影が鮮やかな朝の風景を覚えています。肝試しで初めてサソリモドキを見て驚きました。」

片泊地区三〇代女性



日	月	火	水	木	金	土
27	28	29	30	31	1 ● 新月 旧 3/1	2 ● 旧 3/2
3 ● 旧 3/3	4 ● 旧 3/4	5 ● 旧 3/5	6 ● 旧 3/6	7 ● 旧 3/7	8 ● 旧 3/8	9 ● 上弦 旧 3/9
10 ○ 旧 3/10	11 ○ 旧 3/11	12 ○ 旧 3/12	13 ○ 旧 3/13	14 ○ 旧 3/14	15 ○ 旧 3/15	16 ○ 旧 3/16
17 ○ 満月 旧 3/17	18 ○ 旧 3/18	19 ○ 旧 3/19	20 ○ 旧 3/20	21 ○ 旧 3/21	22 ○ 旧 3/22	23 ○ 下弦 旧 3/23
24 ● 旧 3/24	25 ● 旧 3/25	26 ● 旧 3/26	27 ● 旧 3/27	28 ● 旧 3/28	29 ● 昭和の日 旧 3/29	30 ● 旧 3/30





竹島

タケシマヤツシロラン

神戸大学の末次健司准教授は、二〇二二年四月に竹島で新しいラン科の植物を発見した。ハルザキヤツシロランから進化したと考えられるその植物は「タケシマヤツシロラン」と名付けられた。

その植物の生態は、馴染みある植物の生態とはかなり違い、まず光合成をしない。生育場所は、暗い竹林の林床で、栄養は菌類に寄生して一方的に搾取する。そして、なぜか咲かない花をつける。この花は自家受粉して結実する「閉鎖花」という花で、スミレの仲間でも閉鎖花（緑の蕾をつけるもの）が多い。ただし閉鎖花をつけるのは「送粉者がいない」「栄養源が乏しい」環境になったときで、タケシマヤツシロランのように閉鎖花しかつけない植物は極めて珍しい。

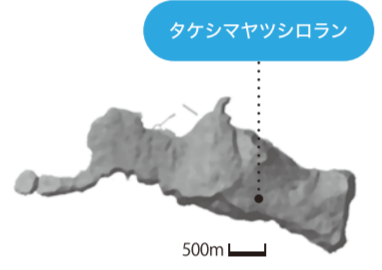
光合成をしない植物は、光の届かない場所を生活圏にできるが、そこには花粉を運ぶ昆虫、つまり繁殖を助ける役が少ない欠点がある。タケシマヤツシロランは、確実な繁殖のために自家受粉を選び、花を咲かせることもやめたと推測されている。

他の生物との共生関係まで絶つてしまうタケシマヤツシロランの大胆な進化は、生命の存続の方が環境に強く依存することを教えてくれる。種の存続のために、環境は重要な要素である。

思い出話

「たまにタケシマヤツシロランを見に来る人がいて、先生に特徴を教わったので案内します。実物を見て喜ぶお客さんを見ると自分も嬉しくなります。」

竹島地区三〇代男性



5

日	月	火	水	木	金	土
1 旧 4/1 ● 新月	2 旧 4/2	3 旧 4/3 憲法記念日	4 旧 4/4 みどりの日	5 旧 4/5 こどもの日	6 旧 4/6	7 旧 4/7
8 旧 4/8	9 旧 4/9 ● 上弦	10 旧 4/10	11 旧 4/11	12 旧 4/12	13 旧 4/13	14 旧 4/14
15 旧 4/15	16 旧 4/16 ○ 満月	17 旧 4/17	18 旧 4/18	19 旧 4/19	20 旧 4/20	21 旧 4/21
22 旧 4/22	23 旧 4/23 ● 下弦	24 旧 4/24	25 旧 4/25	26 旧 4/26	27 旧 4/27	28 旧 4/28
29 旧 4/29	30 旧 5/1 ● 新月	31 旧 5/2	1	2	3	4





大里

空御前と炭焼き窯跡

「うつぼ舟漂着譚」と呼ぶ日本の伝承がある。それはいずれも海の彼方から神が来る民話で、資料にした喜多路の論文によると、その話には、神である者が、本来厳重に密閉された乗物か容器に納まってやって来る、という共通点がある。

ほとんどの類話で来訪者は高貴な身分だが『内容』を分析するとそれは総て本質において「神」であるらしい。なお、この説で神の乗物は、太鼓・白や、南瓜・瓢箪など中身が空洞(うつろ)な植物であろうとされる。

大里の空御前(ウツロンゴゼ)も恐らく同系の民話で、遠い国の若い姫がウツロ舟に乗ってカザシタに漂着したが力尽き道端の岩にもたれて死んだとされる。その道は尾平瀬(A)にあり、若い女を祟るとされた。

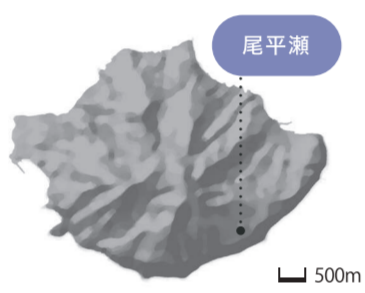
大正時代、尾平瀬に炭焼きの家族が住んだが奥さんの具合が悪くなり、姫が死んだ場所に祠を建てて姫を祀ると回復したという。

牧場の奥を下ると空御前を祀る岩が、そばには見事な炭焼き窯の跡(B)があり、民話と現実の世界が交わる神秘的な空間となっている。

思い出話

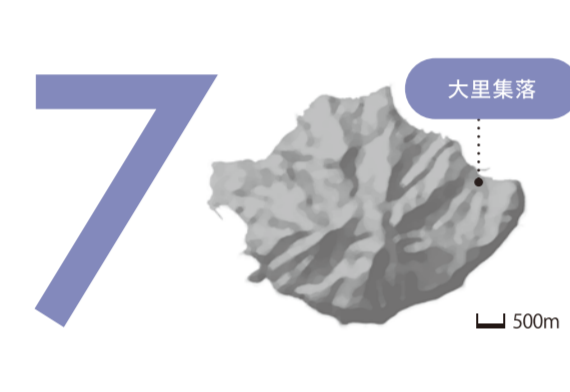
「尾平瀬はいま竹ばかりですが、昔は見晴らしが良く遠足に来ていました。この炭焼き窯は黒島で唯一崩れていない窯で、このまま風化させるのはもったいなく思います。」

大里地区 六〇代男性



日	月	火	水	木	金	土
29	30	31	1 ● 旧 5/3	2 ● 旧 5/4	3 ● 旧 5/5	4 ● 旧 5/6
5 ● 旧 5/7	6 ● 旧 5/8	7 ● 上弦 旧 5/9	8 ● 旧 5/10	9 ● 旧 5/11	10 ● 旧 5/12	11 ● 旧 5/13
12 ○ 旧 5/14	13 ○ 旧 5/15	14 ○ 満月 旧 5/16	15 ○ 旧 5/17	16 ○ 旧 5/18	17 ○ 旧 5/19	18 ○ 旧 5/20
19 ● 旧 5/21	20 ● 旧 5/22	21 ● 下弦 旧 5/23	22 ● 旧 5/24	23 ● 旧 5/25	24 ● 旧 5/26	25 ● 旧 5/27
26 ● 旧 5/28	27 ● 旧 5/29	28 ● 旧 5/30	29 ● 新月 旧 6/1	30 ● 旧 6/2	1	2





大里地区三〇代男性  
「小さい頃は、踊り手の衣装から落ちた色紙が、何となく特別に見えて訳もなく拾っていました。」

思い出話  
その後、庄屋で手踊りFを、初盆の家の庭先で甲い踊りを踊る。踊りの内容は同じで「しんじつ」「おしち」「すずむし」の三曲を踊る。

弓矢踊りは、唄と鉦(かむ)と太鼓の音で踊る。烏帽子の島津軍と兜の龍造寺軍が二列に並び、先頭の島津豊久役と龍造寺隆信役が名乗りあつて踊りは始まる。唄は脇にいるジュウテが、鉦と太鼓は列の間を巡りながら叩く。踊り手は弓を振りながら踊り、弓を射るしぐさをする。終盤、鉦と太鼓が片足跳びになつて拍子が速くなり、踊りの山場となるE。

大里の盆・弓矢踊り  
大里には、盆の十三日に精霊棚Aに仏様と位牌を移して、先祖様を迎える習慣がある。十四日には「先祖にお団子Cを供え、踊子は「踊りぞろえD」をして踊りの稽古をする。十五日は、黒尾神社で大里に伝わる弓矢踊りと長刀踊りを奉納し、後に手踊りをする。今回は、弓矢踊りを中心に紹介したい。

日	月	火	水	木	金	土
26	27	28	29	30	1 旧 6/3	2 旧 6/4
3 旧 6/5	4 旧 6/6	5 旧 6/7	6 旧 6/8	7 旧 6/9 ●上弦	8 旧 6/10	9 旧 6/11
10 旧 6/12	11 旧 6/13	12 旧 6/14	13 旧 6/15	14 旧 6/16 ○満月	15 旧 6/17	16 旧 6/18
17 旧 6/19	18 旧 6/20 海の日	19 旧 6/21	20 旧 6/22 ●下弦	21 旧 6/23	22 旧 6/24	23 旧 6/25
24 旧 6/26	25 旧 6/27	26 旧 6/28	27 旧 6/29	28 旧 6/30	29 旧 7/1 ●新月	30 旧 7/2
31 旧 7/3						





片泊

片泊の盆踊り

片泊の盆踊りは、太鼓踊りを中心に男女の笠踊りと手踊りがあり、最後に初盆を迎える家族の前で供養踊りをする。

盆踊りの当日は①まず「ばばならし」**A**と言って集落内の拝所の前で男性が笠踊りと手踊りを奉納。②「ばばならし」が終わると二日集会所で盆を頂き、太鼓踊りの支度をする。

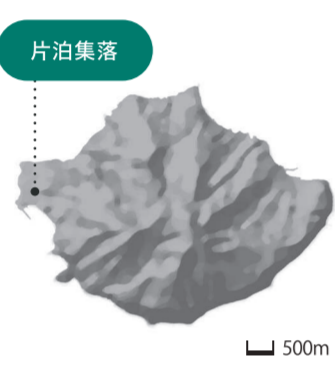
③太鼓踊りは三島片泊学園の校庭で踊る。昔は「堂の前」と呼ばれた現片泊出張所の前で踊った。演者は四種類**B**、花笠で女装した鉦打ち「カネ」、紋付袴の中太鼓「中ダイコ」、手拭いを被った唄い手の「ジュウテ」、大太鼓の「へや」は、背中に色鮮やかな矢旗を背負った十名の踊り手。大太鼓のバチはカヤを束ねて棒状にしたもの。

④太鼓踊りが休憩に入ると婦人の笠踊りが始まる**C**。⑤次に唄い手のジュウテと大太鼓のへやで「ウエアゲ(オエアゲ)」を踊る。⑥最後に初盆の家の人々が集まって座っている場所に向かって、大太鼓の八人が「トモオドイ」**E**という供養踊りをする。過疎化で踊り手の数は足りないが、盆に帰省する片泊出身者の協力によって踊りは引き継がれている。

思い出話

「前の片泊の盆踊りは、大人も子どもも踊り子も、とにかく人がいっぱいいました。ここ数年の盆踊りは、台風やコロナの影響で人が少ないようです。」

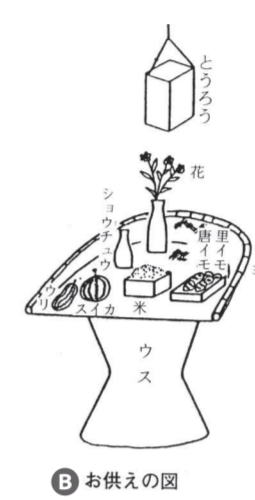
片泊地区三〇代男性



8

日	月	火	水	木	金	土
31	1 旧 7/4	2 旧 7/5	3 旧 7/6	4 旧 7/7	5 旧 7/8	6 旧 7/9
7 旧 7/10	8 旧 7/11	9 旧 7/12	10 旧 7/13	11 旧 7/14 山の日	12 旧 7/15	13 旧 7/16
14 旧 7/17	15 旧 7/18	16 旧 7/19	17 旧 7/20	18 旧 7/21	19 旧 7/22	20 旧 7/23
21 旧 7/24	22 旧 7/25	23 旧 7/26	24 旧 7/27	25 旧 7/28	26 旧 7/29	27 旧 8/1 新月
28 旧 8/2	29 旧 8/3	30 旧 8/4	31 旧 8/5	1	2	3





竹島

十五夜

十五夜は各地区で独自のやり方があって、現在は地区ごとに伝統を残している。竹島では現在、月見をしながらお菓子を食べる。運動会で使う綱で綱引きすることもある。

戦前は、昼間に相撲をとって、夜にカヤでつくった綱で綱引きをした。戦後も似た形で行事をしていた。

相撲は、子どもの数が少なくなつてからは、男女で混じって砂場ですべていたという。綱は少なくとも一九五五年まで作られていたようで、写真に残っている。綱は束にしたカヤを編んで直径三〇cm程の大綱にする。女性がカヤを束にして男性が編んだらしい。朝六時頃から綱作りを始めて、朝八時には完成していた。作り終えた綱は蛇のようには巻いて、お神酒を供えた。

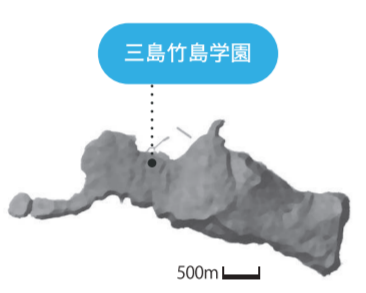
三島村誌によれば、各家で図⑤のようなお供えもされた。白の上到手筥(てみ)をのせて、餅さつまいも、スイカなど丸い形の食べ物も供える。餅は二つの大餅の上に小餅を十二個か十三個(太陰暦でその年の月の数と同数)をのせて飾った。

お供えの餅は、十五夜の夕方に子ども達に与えた。お菓子をあげる家もあった。子ども達ももらった餅やお菓子を集めて全員でわけた。今も十五夜に集まった子供にお菓子を振る舞う。

思い出話

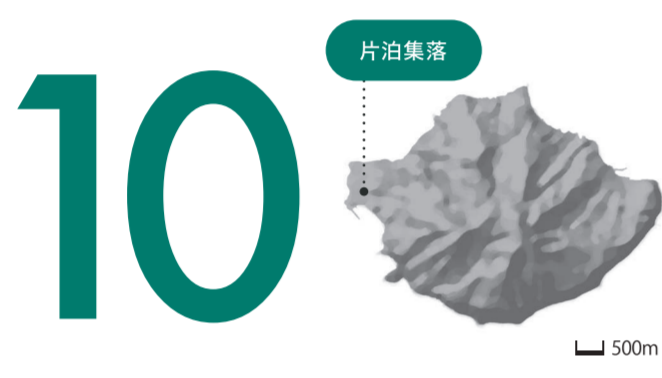
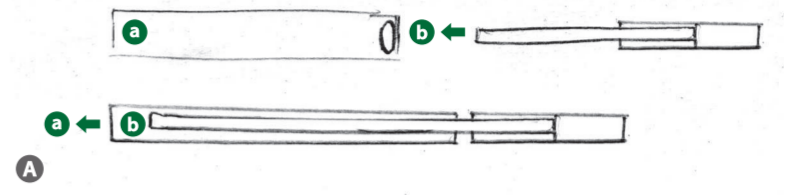
「小学生の頃、相撲の相手が男の子でも特に気にせずに楽しくやってきました。女の子でも勝つ子は普通にいました。」

竹島地区一六〇代女性



日	月	火	水	木	金	土
28	29	30	31	1	2	3
旧 8/6	旧 8/7	旧 8/8	旧 8/9	旧 8/10	旧 8/11	旧 8/12
4	5	6	7	8	9	10
旧 8/13	旧 8/14	旧 8/15	旧 8/16	旧 8/17	旧 8/18	旧 8/19
11	12	13	14	15	16	17
旧 8/20	旧 8/21	旧 8/22	旧 8/23	旧 8/24	旧 8/25	旧 8/26
18	19	20	21	22	23	24
旧 8/27	旧 8/28	旧 8/29	旧 8/30	旧 8/31	旧 9/1	旧 9/2
25	26	27	28	29	30	1
旧 9/3	旧 9/4	旧 9/5	旧 9/6	旧 9/7	旧 9/8	旧 9/9





片泊地区 六〇代男性

「ほどよい弾力の実を選べば、弾は10mは飛びます。単純で夢中になれる遊びです。」

思い出話

二〇一九年、三島片泊学園の子供たちは、地区の住民にあくち鉄砲の作り方を学び、自作して遊んだ。

竹は、空気を塞ぐために実にあつた大きさを選ぶ。押し出し棒は、次弾がうまく筒に残るよう長さを調整する。また棒の持ち手は竹の節の部分を使う。

▲あくち鉄砲は竹筒の端に弾用の実▲を詰め、もう片方には空気圧縮用の栓に実▲を詰めて竹棒で勢よく押し出す。弾用の実▲は空気の圧縮で押し出され軽快な音とともに飛び出す。栓にした実▲は、弾用の実▲があつた位置に移動するのでそのまま次の弾になる。

実は丸く七〜八mmほどで黒紫色や赤に熟す。五〜七月に花をつけ、十二月頃までに実を成す。熟した実は甘く、若干しびみがある。また、未熟な青い実は「あくち鉄砲」という竹鉄砲の弾として、子供の遊び道具となつた。

黒島には「あくち」と呼ぶ約二〜八mの常緑樹が自生する。学名は「モクダバナ」で、あくちという名は、奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島でも使う。分布は、四国南部や九州以南、台湾、中国で、低地から山林に多い。生垣にすることもある。熟した実は生で食べられ、昔の子供には身近な木だつた。

片泊

日	月	火	水	木	金	土
25	26	27	28	29	30	1
2	3	4	5	6	7	8
旧 9/7	旧 9/8	旧 9/9	旧 9/10	旧 9/11	旧 9/12	旧 9/13
9	10	11	12	13	14	15
旧 9/14	旧 9/15	旧 9/16	旧 9/17	旧 9/18	旧 9/19	旧 9/20
16	17	18	19	20	21	22
旧 9/21	旧 9/22	旧 9/23	旧 9/24	旧 9/25	旧 9/26	旧 9/27
23	24	25	26	27	28	29
旧 9/28	旧 9/29	旧 9/30	旧 10/1	旧 10/2	旧 10/3	旧 10/4
30	31					
旧 10/6	旧 10/7					





片泊

平家城・初期畜産業の遺構  
フェリーみしまが片泊港に入港する前、島の低い位置に平地①が確認できる。断崖を背にしたその平地は平家城と呼ばれ、黒島に逃れた平家の落人が最初に暮らした場所という伝承がある。陸から行くには崖を下る必要があり、現在訪れる者はほぼない。

黒島の平家城は、二〇二二年より鹿児島国際大学の中園聡研究室が本格的な発掘調査を行った。結果、十一世紀後半、十三世紀前半の陶磁器や石鍋などを発見している。ただしそれ以降の生活の痕跡は見つかからないため、平家城での居住は中世後期には廃れたと推測される。

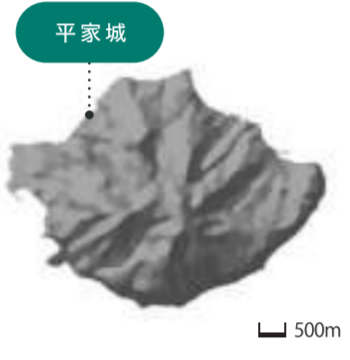
その後、昭和初期に平家城は畑や放牧場になった。その頃、牛が海に落ちないように石壁を築いたそうで、その石壁は今も形をとどめている②。

三島村の畜産業は、大正末期から昭和初期の間に大里で興った。片泊では一九三〇(昭和五)年頃から黒牛が飼われはじめ、この頃から黒牛の飼育が盛んになった③。平家城はかつての放牧の様子を今に残す貴重な場でもある。

思い出話

「私が子どものころ平家城は遠足の場所でした。子どもたちはこの場に自生するアケチの実で竹鉄砲をつくったり、熟した実を食べたものです。」

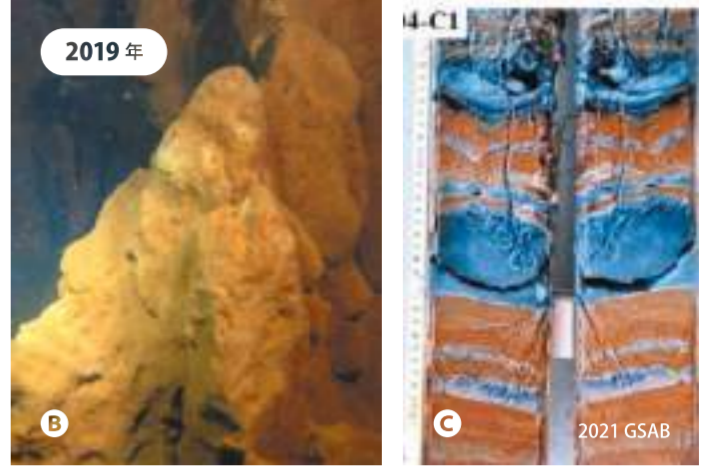
片泊地区一六〇代男性



11

日	月	火	水	木	金	土
30	31	1 ●上弦 旧 10/8	2 ○ 旧 10/9	3 ● 文化の日 旧 10/10	4 ○ 旧 10/11	5 ○ 旧 10/12
6 ○ 旧 10/13	7 ○ 旧 10/14	8 ○満月 旧 10/15	9 ○ 旧 10/16	10 ○ 旧 10/17	11 ○ 旧 10/18	12 ○ 旧 10/19
13 ○ 旧 10/20	14 ○ 旧 10/21	15 ● 旧 10/22	16 ●下弦 旧 10/23	17 ● 旧 10/24	18 ● 旧 10/25	19 ● 旧 10/26
20 ● 旧 10/27	21 ● 旧 10/28	22 ● 旧 10/29	23 ● 勤労感謝の日 旧 10/30	24 ●新月 旧 11/1	25 ● 旧 11/2	26 ● 旧 11/3
27 ● 旧 11/4	28 ● 旧 11/5	29 ● 旧 11/6	30 ●上弦 旧 11/7	1	2	3





硫黄島

長浜湾と太古の海

長浜湾には鉄分を含むサビ色の温泉が湧き、島民が「赤にこり」と呼ぶように港を赤く染める。このこりは堤防の整備で濃くなったという。(A)は赤にこりが少ない頃の長浜湾。現在の湾の海底も鉄サビ色で、円錐状の塊や温泉の噴出孔(B)がある。この状態は鉄酸化細菌によって湾の形成後三〇年ほどでできた。

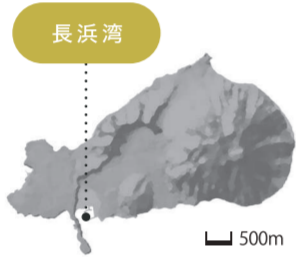
鉄酸化細菌はまた、鉄を含む地層(C)を日々海底に形成している。そして、その地層は現在我々が使う鉄鉱石鉱床(D)の大半と同じものらしい。なお、地球の鉄鉱石鉱床の大半は、約二十三〜二十五億年前、地球の大气が酸素に変わる頃にはできた。

長浜湾が現代の鉄鉱層形成の場であることは、九州大学大学院理学研究員の清川昌一准教授らの研究グループによって発見された。長浜湾は今、太古の海の様子を仔細に観察できる場として世界に注目されている。

思い出話

「まだ港が砂浜だった頃は船の床板を剥がして「トバカン」というサーフィンのような遊びをしていました。サーフィンが世に知られる前の話です。」

硫黄島地区八〇代男性



12

日	月	火	水	木	金	土
27	28	29	30	1 旧 11/8	2 旧 11/9	3 旧 11/10
4 旧 11/11	5 旧 11/12	6 旧 11/13	7 旧 11/14	8 旧 11/15 ○ 満月	9 旧 11/16	10 旧 11/17
11 旧 11/18	12 旧 11/19	13 旧 11/20	14 旧 11/21	15 旧 11/22	16 旧 11/23 ● 下弦	17 旧 11/24
18 旧 11/25	19 旧 11/26	20 旧 11/27	21 旧 11/28	22 旧 11/29	23 旧 12/1 ● 新月	24 旧 12/2
25 旧 12/3	26 旧 12/4	27 旧 12/5	28 旧 12/6	29 旧 12/7	30 旧 12/8 ● 上弦	31 旧 12/9